

商店街の Void(空所)から 2040 宇和島の未来を変える

2年1組 河野真里奈 2年1組 矢野 陽梨 2年2組 白井 香帆
2年2組 河野 華音 2年2組 小島 侑芭 2組2組 濱田 梨音
指導者 都築 果林

1 課題設定の理由

宇和島市は、少子高齢化や人口減少により、年々観光客が少なくなっている。これらに起因する課題が日本全体で顕著に表面化すると言われているのが 2040 年である。宇和島市においても 2024 年の総人口 67,427 人、高齢化率 41.1%は 2040 年には人口は約 32%減の 45,916 人、高齢化率は 47.2%まで上昇するという予測を示している。[1]

町の中心に位置する商店街においても廃業や空き店舗の増加が見られる。加えて、城下町として発展してきた町の歴史と関係し、徒歩移動を考慮できる 2 キロ以内に駐車スペースも少なく、気軽に訪れにくい立地条件ともなっている。(図 1) また、2024 年 4 月に発生した豊後水道地震では隣接する南予文化会館をはじめ多くの被害があった。南海トラフ巨大地震が今後 30 年以内に発生する確率が 80%に引き上げられたことを考えても、防災面からも未来の宇和島や商店街について考える必要がある。よって私たちは特に空き店舗や空きスペースといった町の空所(Void)を活性化の拠点とし、研究を行うこととした。

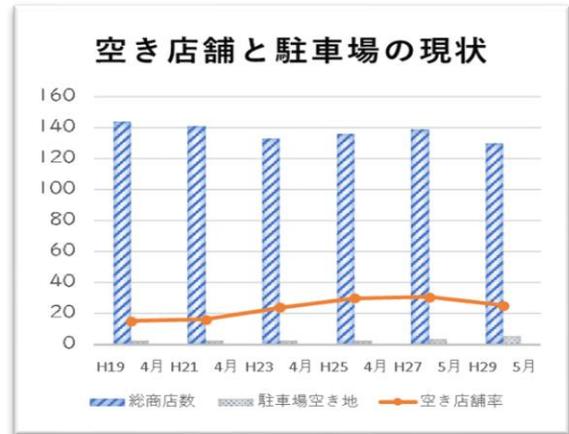


図 1 空き店舗と駐車場の状況 (宇和島市)

2 仮説

- (1) 商店街の Void (空所) を活用することで、地域住民の利用が増加し経済効果が生まれる。
- (2) 地震発生を想定した活用を行うことで、災害に強い商店街になる。
- (3) 多様な Void のスタイルが異世代コミュニケーション場となり観光地としても機能する。



図 2 能登半島地震における家屋倒壊

3 研究の方法

- (1) 利用者のニーズに応える空間作り
宇和島市コワーキングスペース「ホリバタ」を通じた先行研究[2]より、Void 活用のプランとして「学習スペース」を設定し、実際に運用されている「ホリバタ」のリニューアルのためのデザインに取り組む。リニューアル後の利用状況の変化や利用者の反応から、商店街内の「学習スペース」づくりの根拠データとする。
- (2) 行政や大学と連携した事前復興
災害時、倒壊の可能性が高まる管理の行き届いていない空き店舗の倒壊による被害が、避難の際の妨げになることが考えられる。(図 2) 東京大学復興デザイン研究体や愛媛大学防災情報研究センター、宇和島市危機管理課と連携し、専門家の助言をいただきながら未来を見据えた商店街のデザインについて検討・検証を行う。事前復興プランはイベントなどを通じて市民に発信し、そこで得られた意見や助言から更に改善を加える。

4 結果と考察

- (1) 「ホリバタ部」の設立と空間デザイン

① 「ホリバタ」について

青少年市民協働センター(中央公民館の1、2階)の通称。個人・団体・企業等と行政が協働して、ふるさと宇和島を未来につなげる、持続可能な地域社会の創り手を育成する、公民館の一事業として令和2年度よりおこなわれている。中学生~39歳の青少年を「ホリ

バタ世代」と設定し事業の主な対象としている。

② 「ホリバタ部」の設立

「ホリバタをもっと好きになる」をテーマにホリバタを愛する 14～18 歳までの利用者が有志を募って立ち上げた。その活動に加わり (図 3) 利用者のニーズや、イベントの計画、実効性の検証を行った。

「つくる」企画・実行/ルール作り/新たな遊びの提案

「つたえる」SNSによる発信

「つながる」意見箱の設置/地域や学校との連携づくり

③ リニューアルに伴う空間デザイン

行政やデザインを担当する建築士の方々との協議

商店街における Void を活用した学習スペースにおいても静音、飲食の扱い、可変性への配慮



図 3 ホリバタ部の活動

(2) 商店街事前復興プラン

① 防災の観点における課題

東京大学工学院工学系研究科都市工学専攻都市デザイン研究室の学生と商店街の現状分析と防災の観点における課題分析を行った (図 4)。沿岸地域から丸山に向かう大通りの目印の不足、暗渠の上に建てられている店舗、空き店舗の倒壊やアーケード崩落の危険など多くの課題が挙げられた。

② 商店街に対する地域のニーズ

ア ホリバタ世代

学生の要望としては学習ス

ペースの設置が多く挙げられた。本校生徒だけでなくホリバタ世代からも多く挙げられており、Void 有効利用の重要なニーズの一つと考えられる。

イ 東日本大震災の復興事例

2024 年 7 月に東北地方での視察に参加し、高い防潮堤建設を選択しなかったまち、行政に委ねず住民自身が復興計画とまちづくりを行ったまちについて学んだ。

③ プランの提案

ア 商店街イベント「伊達な城下町」での事前復興ワークショップ開催

ワークショップを実施した東京大学院生とともに商店街にて商店街を中心とした宇和島事前復興プランを提案した (市長を含む 70 名以上が来場)。

イ 第 6 回復興デザイン会議全国大会 (会場：東京大学) での発表

東北視察での学びとまちづくりに向けた提案をオンラインで行った。当日は現地からの助言の他、動画の配信による普及も行った (現地、オンライン含め 100 名以上視聴)。



図 4 Miro で共同作成した分析シート

5 まとめと今後の課題

空き店舗を利用した学習スペースの開設は、イベントで寄せられた声やアンケートでは好意的な意見が多かった。しかし、崩落の危険があるアーケードの撤去については商店街店舗経営者から所有の問題の指摘があったり、高齢者を中心に天候に左右されない利点が損なわれたりするなど否定的な意見が多かった。今後は、場所の確保や運営方法など学習スペース開設の実現や観光客を呼び込むホテルプランの提案など、企業などとも連携していく計画である。

6 参考文献

[1] 宇和島市 HP 「第 2 章宇和島市の現状と課題」 <https://www.city.uwajima.ehime.jp/>

[2] 令和 5 年度 SSH 課題研究「理想的なコワーキングスペースの形成」

図 2 中日新聞 2024. 2. 1 記事「壊れた空き家は勝手に壊せない…道路塞ぐ木造家屋、所有者不明が復興の壁に」

7 謝辞

本研究に御協力いただいた東京大学復興デザイン研究体、愛媛大学防災情報研究センター、宇和島市中央公民館の皆様、この場をお借りして感謝申し上げます。